



弥生だより vol.2

弥生神社



いかがお過ごしてしょうか。境内の紫陽花も鮮やかに色づきはじめ梅雨を待つばかりとなりました。

どこか不自由さを感じる生活ですが、心のゆとりがあると、身近で些細なことにも心動かされたり、小さな植物の不思議や日々変化する風景の美しさに、はっとする瞬間が多くなります。慎重に安全に、けれど心も体も柔らかくして過ごしたいものです。またゆっくりと皆さまにお会いできますように。

弥生神社

弥生神社の社務猫をご紹介します。
ちよろときーこです。母子猫です。
ある嵐の日の翌朝、ちよろが生まれたばかりのキー
コをくわえて弥生神社にやってきました。



ちよろ

撫でられるのとおかか
が好きです。最近ほ縄
張り争いからも離脱し
てのんびりしています。



ベー



きーこ

窓から外を眺めるのが好きで
す。ちよっと臆病なぼんやりと
したおじょうさん。春生まれ。



はっ...!



一緒に丸くなれば...
ちよろっきー

社務猫についてもっと詳しく知りたい方は、弥生神社ホームページにある
「社務猫のお話」をごらんくださいませ。

→ <https://ebina-yayoijinja.work/neko-cat>

弥生神社【宗教・文化講座】「古代エジプト人の精神世界」



第七章
「天空に還る
—副葬品のはなし・一—」

弥生神社【宗教・文化講座】

「古代エジプト人の精神世界」

講師

和田 浩一郎

(國學院大學兼任講師・エジプト学)

5月9日(土) 14:00~16:00

5月9日 第10回めの連続講座「古代エジプト人の精神世界」をオンラインにて開催しました。講師はエジプト学ご専門の和田浩一郎先生。遠方からのご参加も可能になり、多くの皆さまにお集まりいただきました。埋葬に関わるお話はいよいよ7章を迎え、今回のテーマは副葬品について。遺体を納める棺の素材や形の変遷、棺の内部装飾に込められた象徴的意味から当時のエジプト人が抱いていたあの世観に触れました。古代エジプト独特の人形棺の形や色の変遷、棺の再利用にも興味が湧きました。さらには土器棺、陶棺、“すまき”など、中間層以下である庶民の葬いの形態にもお話は展開し、埋葬方法からうかがえる社会背景や古代エジプト人の死生観について学びました。ご参加の方からもさまざまな質問があり、テーマについて考え合う貴重な時間になりました。



第八章
「銀の骨と瑠璃の髪
—副葬品のはなし・二—」

弥生神社【宗教・文化講座】

「古代エジプト人の精神世界」

講師

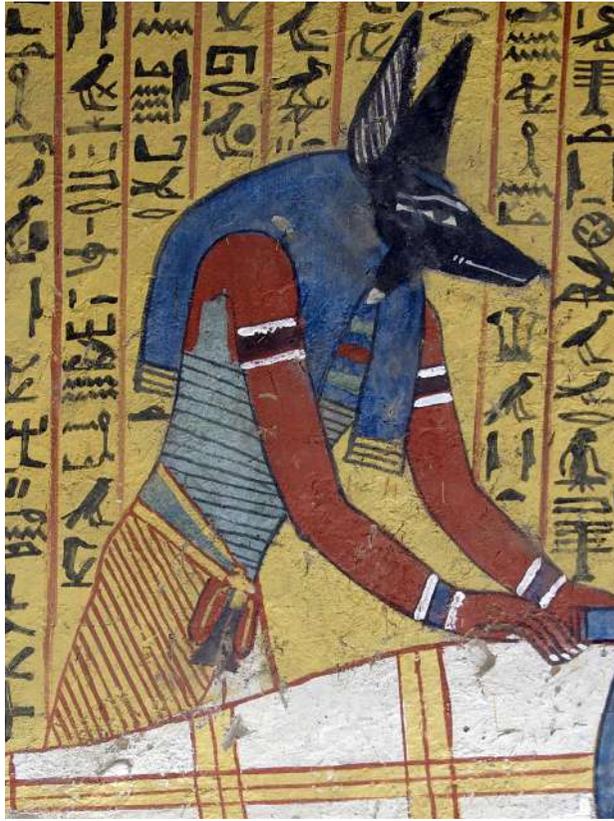
和田 浩一郎

(國學院大學兼任講師・エジプト学)
著「古代エジプトの埋葬習慣」(ポプラ社)

6月13日(土) 14:00~16:00

次回は6月13日です。お気軽にご参加ください。こちらのフォームよりお申し込みください

→ ebina-yayoijinja.work/kouzamail



エジプトの神々の毛髪は、古くからオリエント世界で珍重されていた、ラピスラズリでできていると考えられた。遠くアフガニスタンからやってくる希少性や、時に星空のような景色を見せることが選定の理由だったのだろう。ツタンカーメン王のマスクの眉や頭布の縞が、青色で表現されているのもこのため。



スズラン。君影草。季語は夏。

二十四節気と七十二候

小満から芒種へ

暦とともに使われてきた「二十四節気」とそれぞれの時期をさらに区分する「七十二候」。その名称は季節の流れや節目を表すものとして使われます。そんな自然の変化に沿った暮らしの中には脈々と受け継がれてきた習わしや食文化があります。今回は、新暦の五月二十日頃にあたる「小満」から六月二十日にあたる「芒種」までを紹介します。

小満

しょうまん

(新暦 五月二十日～六月四日頃)



「万物盈満 (えいまん) すれば草木枝葉繁る」*

陽気がよくなって、草木などの生物がしだいに成長して生い茂る季節。

*「木の葉採り月 (このはとりつき)」…小満の時期にあたる旧暦の四月の別名。蚕の餌である桑の葉を摘む頃という意味がある。

初候…蚕起食桑 (かicoおきてくわをはむ) 五月二十一日頃

蚕が桑の葉を盛んに食べだす頃。

次候…紅花栄 (べにばなさかう) 五月二十六日頃

紅花の花が咲きほこる頃。

末候…麦秋至 (むぎのときいたる) 五月三十一日頃

麦の穂が実り始める頃。

【旬の野菜】 そらまめ、しそ

芒種

ぼうしゅ

(新暦 六月五日～六月二十日頃)



「芒ある穀類、稼種する時也」*

*『こよみ便覧』江戸時代の暦の解説書より。

芒 (のぎ) は穂先にある実の外側のかたい毛のこと。芒種は芒のある穀物の種まきの季節。

初候…蠟螂生 (かまきりしろうず) 六月五日頃

かまきりが卵からかえる頃。

次候…腐草為螢 (くされたるくさほたるとなる) 六月十日頃

草の中から螢が舞い、光を放ち始める頃。

末候…梅子黄 (うめのみきばむ) 六月十五日頃

梅の実が黄ばんで熟す頃。

【旬の野菜】 らっきょう、とまと

(参考) 矢嶋文子『旬のやさい歳時記』(平成二十六年)主婦と生活社

白井名大『日本の七十二候を楽しむ―旧暦のある暮らし―』

(平成二十五年) 東邦出版



神社で「ドライフラワー」を作る。

ワークショップを開催する会場にはいただいたり産直で仕入れたりした切り花を飾って皆さまをお迎えするのですが、そのまま枯れてしまうのが惜しくて、なかでもバラやカスミソウ、アジサイなど乾燥しやすい花でドライフラワーを作っています。社務所を飾るスワッグを作ったり、ユーカーリースを作るワークショップの素材にして使っています。

生け花は枯れてしまう直前まで楽しみます。そうして枯れかけの時、花びらが散ってしまう前に、茎に麻紐を結び、部屋のあちこちにぶら下げます。乾燥材を使った本格的な作り方もありますが、風通しの良い社務所の部屋にぶら下げておくと、ちよつと形は縮みますが、花々の鮮やかな色はそのままに、あるいは深みを増したドライフラワーが完成します。薔薇やユーカーリの葉は香りが増すように感じます。今年は、クリスマスローズやシャクヤクも試してみました。ドライフラワーになる定番の花以外でも、思いがけずうまくいくことも。これからもそんな発見がありそうです。



シャクヤク



クリスマスローズ

五月

ユーカリの会

毎年の初夏や初冬に開催しているユーカリの会。今年は神社にお越しいただくのもままならず、けれどもこんな時こそご自宅でユーカリの爽やかな香りをお楽しみいただきたく、五月に入りご自宅でのユーカリの会を企画しました。

ユーカリの葉っぱをくしゃくしゃと揉んで綿や絹の布に包み込む、ユーカリ葉のふっくら香り袋。それから、ユーカリの枝葉とドライフラワーを束ねて壁にさげて飾るスワッグを作っていたらこうと、材料と作り方を添えて、ご希望の皆さまに郵送でお届けしました。布地を切ったり、麻紐を巻いたり、ユーカリの枝葉を分けたり、素材の準備から梱包まで、たくさんの時間をいただきました。植物の芳香に満たされながら心地よく作業しました。ご参加いただいた皆さまからは、たくさんのメッセージと作品の写真をお送りいただきました。ありがとうございました。



これまで作りためておいたドライフラワー



ユーカリの枝葉は3週間ほど神社で乾燥



スワッグ作りに欠かせない麻紐



葉も花も壊れませんよう…丁寧に箱詰め



香り袋とスワッグのセット



「ユーカリの会」参加の皆さまより

自宅で





ちよび

ご参加ありがとうございました。

～ユーカリのスワッグ～



短く切って籠につめて。



ざっくりと何本もまとめて。

花と一緒にシンプルに。

横に張った紐に
一本ずつぶらさげて。



一本を輪にして結んでリースのように。

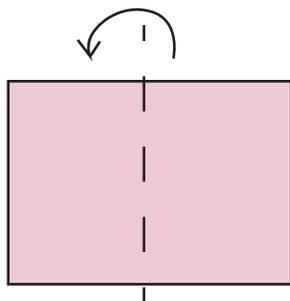


短めのスワッグに。

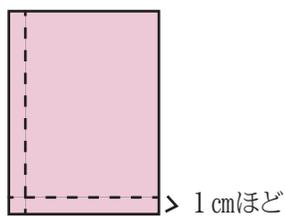


一本だけ壁に掛けて。

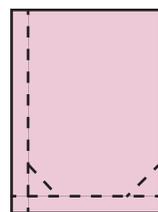
～ユーカリ葉のぷっくり香り袋～



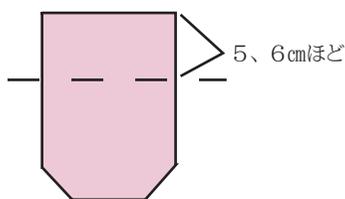
①中表にして半分に折る。
(15×20の布地)



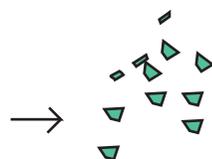
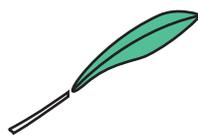
②下辺と脇を縫う。



③下の両端を斜めに縫う。



④ひっくり返して上端を内側に折りこむ。



⑤ユーカリの枝や葉をよく碎いて袋の中に詰め、
お好きな紐で結ぶ。

(10～15枚ぶんをゆとりをもって詰める)

お山の針仕事・2



ヤギの食べ残しをいつも狙っているニワトリ



Karin Needlework 中村鹿林です。今回の作品は、キャンバスワークという技法を用いてつくったニワトリです。キャンバスワークとは、目の粗い生地、布目を数えながら規則的な模様を刺して描いていく刺繍です。

わたしはこのキャンバスワーク刺繍が好きなのですが、もっと好きなのがニワトリです。刺繍のデザインにするのいうってつけであり（鳥全般図案にしやすい）、何よりも本物が可愛いのです。家では七羽ニワトリを飼っていてよく観察をします。ポンポンとふくらんでいるおしり、たまに首を傾げるところなど、ずっと眺めていられる面白い生き物です。

そんな我が家の小さな牧場に最近仲間入りしたのが、ヤギの赤ちゃんです。乳用に飼いはじめて三年目の母ヤギが、四月の中旬に産みました。オスとメス一匹ずつで、それはもうたまらない可愛さです。人懐っこく、近くに行くと寄ってきてスリスリしたり、指を噛んだりしてきます。歯もまだ小さいので全く痛くありません。嬉しそうなきはしつぽをピンピン振ります。近頃はやんちゃをするようになり、ニワトリたちは追いかけることも。そんないとおしい仕事や場面を刺繍で表したいと思うけれど、なんせヤギはまず絵に描くのが難しいのでなかなか図案にできません。いつか良いアイディアを思い付くまで待ちます。

寂しいことに、子ヤギたちを家で飼うのは夏までです。夏になると二匹とも出荷します。長野県の南信地域では毎年山羊市場というのが開かれ、全国の牧場などから買い付けにやってくる人がいるのです。それまで、美味しいごはんをたくさん食べさせてあげるのが仕事です。



花巻



5～6個分

《生地》

薄力粉 140g

強力粉 60g

インスタントドライイースト 小さじ1

塩 小さじ1/2

砂糖 大さじ1

水 100g

サラダ油 大さじ1

《成形用》

ゴマ油 大さじ1

塩 ひとつまみ

お昼やおやつに、シンプルな花巻はいかがでしょうか。前日に生地を捏ね、冷蔵発酵させるレシピです。もっちりとした歯切れの良い食感にするために、薄力粉と強力粉を合わせましたが、ご用意がなければ、どちらか一種でもお作りいただけます。全量強力粉であれば、水分量は若干多めにした方が良いでしょう。



前日— 生地を捏ねる

ボウルに粉・イースト・塩・砂糖を入れ、混ぜておきます。常温の水（冬場は 30 度程度に温める）を加え、粉気がなくなるまで捏ねます。台に移してさらに捏ねます。

生地に伸びが出てきたらサラダ油を加え混ぜ、油気が馴染んだら、丸くまとめます。

ビニール袋に入れ、余裕を持って口を縛り、15～30分程度放置した後、一晚（8～10時間程度）冷蔵庫に入れておきます。

翌日— 成形

袋の上から平らに軽く潰し、30～1時間室温に置きます。

台、またはまな板に打ち粉を振り、生地を 35×25 センチ程度の長方形に伸ばします。伸ばしづらい時は5～10分休ませましょう。

表面にゴマ油を流し、分量の塩を振り、縁を残して手で全体に伸ばします。

手前からロール状に巻き、端を指で閉じ、包丁で2センチ程度の幅に切ります。





1 簡単な成型

ふたつ重ね、打ち粉を振った菜箸で中央をぐっと押さえ、抜きます。

2 通常の成型

ふたつ重ね、指で押さえながら伸ばし、捻った後に下側で両端を合わせ、形を整えます。



3

蒸し器にお湯を 30 ~ 40 度程度になるように沸かし、上段にオーブンシートを敷いた花巻を並べ、15 ~ 30 分程度発酵させます。表面がふんわりとしたら、強火で 15 分蒸します。

※室温等の条件により、発酵時間は前後します。

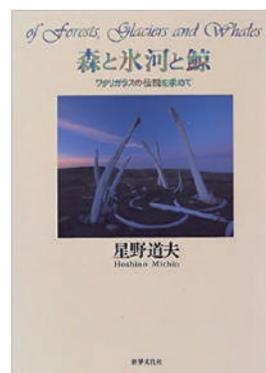


ゴマ油と塩の他に花椒を加える、サラダ油と黒糖に置き換える、などのアレンジもお勧めです。

森と氷河と鯨

ワタリガラスの伝説を求めて

星野道夫（著・写真）



写真家 星野道夫はアメリカ北西海岸のネイティブたちに伝わるワタリガラスの神話を追って、アラスカを北上しシベリアへ渡った。本書は彼らのルートとモンゴロイドの足どりをたどる旅の記録である。九十六年、この旅の途中にシベリアで星野は急逝した。そのため本書は未完になったが、シベリアにわたつてからの日誌とチュコト半島の地で聞いたワタリガラスの神話を記したメモが遺されており、この旅が期待通りであったことがうかがえる。

苔むした太古の森と、鯨とともに生きる狩猟民の活動や人類の移動の記憶が刻まれた氷河に身を置いて、星野が撮った多くの写真には、「神話的な世界を生きた人々と同じ目線で旅がしたい」という願いがそのまま表れているように感じられる。

旅の最初に出会ったクリンギット（トリンギット）族のボブ・サムが活字に書き起こしたというワタリガラスの神話載っている。クリンギット族の古老から伝え聞いたワタリガラスが全てのものに魂をもたらず、神話である。多くの神話のように存在の起源を語るのではなく形あるものの中に宿る spirit=魂について語られる。冒頭、次の言葉で始まる。

Don't be afraid to talk about the spirit.

「魂について語ることを恐れてはならぬ。」

“How Spirit Come To All Things”

…ワタリガラスがこの世界に森を作ったとき、生き物たちは魂を持っていなかった。木も生長せず、動物たちも動くことはなかった。(略) ワタリガラスが浜辺を歩いていると、海の中から火の玉があがってきた。火の玉が消えないうちに手にいれなければならなかったワタリガラスは、嘴が長く飛ぶのが速いタカに、取ってきてくれるように頼む(略) タカは地上を離れ炎を手に入れると、ものすごい速さで飛び続けた。タカの顔は炎に包まれたが、戻ってくると、炎を地上へ崖へ川の中へと投げ込んだ。そのとき全ての動物たち、鳥や魚たちは魂を得て動き出し、森の木々も伸びていった。…

そして、木も岩も風もあらゆるものが魂をもっており、私たちを見つめているのを忘れぬこと、あらゆることを教えてくれる森だけは守り続けることを伝えて物語は閉じられる。

星野がボブと出席した、ネイティブの墓の埋葬品をめぐる「リペイトリエイション（帰還）」の会議で、クリンギット族の古老が「なぜ魂のことを話さない」と博物館関係者に訴える場面がある。ここでは見えるものに価値をおく文化と、見えないものに価値をおく文化が対峙しており、我々にも同様の問を投げかける。

アラスカのクイーンシャーロット島では、海沿いに朽ちかけたトーテムポールが立ち並ぶ。この島で星野は、祖先の作ったトーテムポールを「土地に深くかかわった霊的なもの」として見守り続けるハイダ族の夫婦と出会う。彼らは森が押し寄せトーテムポールが自然の中に消えてしまってもかまわないという。そこはいつまでも聖なる場所になるのだからー。

言葉にできない、してはならない体験があることを、星野の文章は端々で伝える。「神話は語り手によって命を吹き込まれる」、「神話の持つ力は、語り手の内なる世界観と関わる」という実感が込められているのだらう。

魂や直観による体験は言葉にし難い。人々はそれでも語ろうと努めてきた。先のクリンギット族の神話も、口承によって数千年生き続けた。その源には、太古から未来へ途切れぬ時間と雄大な自然の中で育んだ彼らの思想がある。本書には、ネイティブアメリカの古老の次のような言葉が引用されている。

「自分自身のことでも、自分の世代のことでもなく、来るべき世代の、私たちの孫や、まだ生まれてもいない大地からやってくる新しい生命に思いを馳せる。ーアメリカ先住民の古老ー」

（権禰宜 池田奈）



アメリカ大陸の北端、ホイントープ村。墓に鯨の骨が並ぶ。

Think not forever of yourselves, nor of your own generations.
Think of continuing generations of your families, think of our grandchildren and of those yet unborn whose face are coming from beneath the ground.

—American Native Elder—